

## 芭蕉はなぜ義仲寺に葬られたのか

— 芭蕉と近江とのかかわりについて考える

### 芭蕉はなぜ義仲寺に葬られたのか (前回の続き)



従来、「芭蕉は義仲を敬慕していたからだ」と説明されてきました。そう書いている本も数多くあります。しかし、それは違うだろうと私は思っています。

義仲寺の前の道路は結構狭いですが、これが当時、幹線道路だった旧東海道です。今は埋め立ての結果、町中になっています。しかし、当時は、すぐ前が琵琶でした。「骸を木曾塚におくるべし」との言葉に続いて、芭蕉は述べています。「ここは東西の巷、さざなみよき渚なれば、生前の契り深かりし所なり。なつかしき友達の訪ね寄らんも使わずらわしからじ」と(路通『芭蕉翁行状記』)。そこには、「義仲」の「よ」の字もありません。

「びわこのほとりて眠りたい」「近江の門人たちのところに帰りたい」というのが芭蕉の本意だったのではないかと、私は推察しています。

### 義経・義仲と芭蕉

芭蕉は確かに悲劇の主人公が好きでした。とりわけ義経を敬慕していました。「おくのほそ道」の旅では、「飯塚」のところで、義経の従者佐藤庄司の旧跡を訪ねました。近くの古刹・医王寺に「義経の太刀、弁慶おいの笈のぼり」が保存されていることを知り、「笈も太刀も五月に飾れ紙のぼり緘」と詠んでいます。(「笈」とは行者が荷物を入れて背負った箱です)。

また、平泉の義経の旧城たかだち「高館」では、「義臣すぐってこの城にこもり、功名一時の叢となる」と述べ、「国破れて山河あり、城春にして草碧みたり」との杜甫の「春望」の一節を引用して、「夏草や兵どもの夢の跡」との名吟を残していることは、皆さんもご存じのところでしょう。

では、義仲の場合はどうでしょうか。芭蕉は「おくのほそ道」の掃路、北陸路で義仲の旧城・「ひうちが城」のそばを通り、「義仲の寝覚めの山か月悲し」と詠みました。しかし、この句は「おくのほそ道」には収録していません。また、「ひうちが城」を「義仲の旧城」とも書いていません。

その少し手前、小松の「多太神社」のところで、齊藤別当実盛が源義朝から授かったという兜について、芭蕉は詳述しています。そして、「むざんななや甲の下のきりぎりす」と詠んでいます。実は、実盛は幼い義仲をお助けた大恩人です。白髪を黒く染めて討死した実盛の首を見て、義仲は号泣したといわれています。

これは、平家物語や源平盛衰記、世阿弥の謡曲にも取り上げられている有名なエピソードです。一編のドラマといってもよいでしょう。古典や謡曲に通じていた芭蕉はそのことはよく知っていたはずですが、「おくのほそ道」ではまったく言及していません。

芭蕉は義仲寺の無名庵に何回も滞在し、ここで越年もしました。無名庵は義仲の愛妾・巴御前が夫の菩提を弔っていたところでした。「あなたはどなたですか」と問われ、「妾わらわは名もなき女性にしようなり」と答えたことから無名庵と呼ぶようになったといわれています。

(保勝会前理事 山田 稔)